

称号及び氏名	博士(看護学) 神戸 美輪子
学位授与の日付	平成25年3月31日
論文名	潜在看護師のための復職準備教育プログラムの構築 Design of the Program on Refresher Training Program for Inactive Nurses to Return to Nursing
論文審査委員	主査 星 和美 副査 上野 昌江 副査 杉本 吉恵 副査 細田 泰子

論文内容の要旨

【目的】看護師確保は急務の課題であるが、資格を持ちながら看護業務に従事していない潜在看護師の1割が復職することでこの需給ギャップが解消すると試算されている。潜在看護師は、女性特有のライフ・ワーク・バランスの変化から生じているため、復職に向けた有効な教育・研修が活用できる体制があれば復職し、生涯看護職として就労し続けられる可能性がある。本研究はその点に注目し、潜在看護師に対する有効な復職準備教育プログラムを構築することを目的とした研究である。

【方法】潜在看護師の復職に関する基礎データを得るために、調査1~3を行う。これらの結果をもとに、潜在看護師の復職準備教育プログラム（実験群研修）を立案し、準実験的前後評価を行う。いずれの調査も本学の研究倫理委員会の承諾を得て実施した。

【予備研究】

調査1：看護師・潜在看護師を対象とした復職研修に関するグループインタビュー

便宜的抽出法を用いて看護師・潜在看護師14名を7名ずつのグループに編成し、グループインタビューを行った（2010年9月）。潜在看護師の復職研修のあり方についての意見を聴取し質的に分析した。復職研修は自分の意志や能力を明確にし、情報を取り入れ復職につなげる場でもあるととらえていた。

調査2：看護師・潜在看護師を対象とした看護技術実践の自己評価に関する調査

A校卒業者で看護師免許を取得し、病院または診療所での就業経験がある看護師242名を対象に、無記名の質問紙郵送調査を行った（2010年7月～2010年12月）。就業看護師と潜在看護師、潜在期間の長短での比較を行い、技術の自己評価レベルの特徴を把握した。就業看護師との比較で、潜在看護師は救命救急処置技術や安全管理の技術、観察やアセスメントを要する技術での自己評価は低く、復職時に臨床から求められる能力を高く査定していた。

調査3：病院看護部教育担当者を対象とした潜在看護師復職研修に関する調査

200床以上の全国の一般病院188病院を対象に無記名の質問紙郵送調査を行った（2010年11月～2011年4月）。潜在看護師の復職研修の実態を知るとともに、復職時に看護部が求める技術項目とそのレベルを明らかにし、新人看護師との比較を行った。病院が潜在看護師に求める看護実践能力は新人看護師より高く、研修内容では感染対策や医療安全が扱われていた。

【本研究】

プログラムの作成：調査1～3の結果から復職準備教育プログラム（実験群研修）を作成した。実験群研修は、医療安全・フィジカルアセスメント（救急処置を含む）をテーマとして、受講者同志のピア・グループセッションを取り入れた。コントロール群研修は、一般的な内容である医療安全・感染対策について講義中心の研修とした。

プログラムの実施と評価：実験群15名、コントロール群14名に対して、それぞれの研修を実施した。研修前後の質問紙調査、受講後のインタビュー調査を行った（2012年4月～2012年10月）。調査内容は、看護実践力の自信や医療事故の不安、復職に向けた意欲、自己効力であり、研修受講前後でどのように変化するかについて実験群とコントロール群の比較を行った。インタビュー内容は質的に分析した。

【結果】実験群とコントロール群の2群に分けた潜在看護師は、年齢や就業期間、潜在期間、研修前の復職の不安や自信等の全ての項目で差はなかった。それぞれの研修後で不安や自信等では2群間の差はなかったが、意欲の変化量は実験群に高い傾向がみられた。また、研修前後の個人間の変化についてみると、実験群では不安（ $p<0.05$ ）、意欲（ $p<0.05$ ）、自信（ $p<0.01$ ）で差があったが、コントロール群では、自信（ $p<0.05$ ）だけで差があった。自己効力はどちらの群も、研修前後での差はみられなかった。共分散分析では、群による主効果は見いだせなかった。研修の時間や学習の内容と理解、受講メンバーとの交流や研修の楽しさ、今後の研修受講の希望について全て肯定的な評価が得られたが、フィジカルアセスメントの学習の満足感は66.7%であった。研修1週間後のインタビューでは、復職へ向けて復職先を

探す、学習への取り組みを始めたなど行動の変化を生じた人がおり、復職への力を得た、看護が好きだと実感できたなども語られた。

【考察】潜在看護師は技術の自己評価が低下し、復職への不安を持っている。復職研修は知識や技術の再確認だけでなく、復職を意志決定するプロセスでも意味あるものである。立案した復職準備教育プログラムは、群での主効果はみられなかったものの、復職への不安を軽減し、意欲や自信を増加させる可能性が示唆された。また、潜在看護師同士で気持ちを共有し交流することで、復職への刺激を得て行動変容があった人もいる。しかし、一度の研修ではわからないという意見もあり、自己効力の押し上げには至らなかった。また、フィジカルアセスメントで学習の満足感が70%未満であったことは、基礎教育で履修経験のない新しいカリキュラムの内容であることも考えられる。潜在看護師の多くはライフステージの変化から離職していて、復職への意欲を持っている人が多数存在する。看護師不足への対応という数量的な面だけでなく、看護師個人のキャリアの視点でも復職をとらえ、潜在看護師の復職教育を充実させていくことが今後も望まれる。

学位論文審査結果の要旨

看護師確保は急務の課題であるが、資格を持ちながら看護業務に従事していない潜在看護師の1割が復職することでこの需給ギャップが解消すると試算されている。潜在看護師は、女性特有のライフ・ワーク・バランスの変化から生じているため、復職に向けた有効な教育・研修が活用できる体制があれば復職し、生涯看護職として就労し続けられる可能性に着目し、潜在看護師に対する有効な復職準備教育プログラムを構築することを目的とした意義のある研究である。

予備研究で①看護師・潜在看護師を対象とした復職研修に関するグループインタビュー、②看護師・潜在看護師を対象とした看護技術実践の自己評価に関する調査、③病院看護部教育担当者を対象とした潜在看護師復職研修に関する調査を行い、復職研修の目的や方法、潜在することで自己評価が低下する技術項目や潜在看護師に求める技術レベル、復職研修の現状などの考察を加えて復職準備教育プログラムを立案している。その内容は自己評価が低下している医療安全とフィジカルアセスメントや救急処置を扱い、ピアの存在が大きいことから意図的に研修に取り入れて組み立てたものであり、医療安全や感染対策を扱う一般的な研修との比較を行っている。

潜在看護師に対する本研究では、実験群15名、コントロール群14名の対象者が得られている。共分散分析で群による主効果はみられなかったが、実験群では意欲の変化量でコントロール群に比較して高い傾向が出ていたこと、またコントロール群では自信だけの差であったが、実験群では不安、意欲、自信で研修前後に有意な差がみられたことから、復職への不安を軽減し意欲や自信を増加させる可能性も示唆された。また、ピアの存在から復職への刺激を受け、具体的な復職行動や復職に向けた学習を始める者もあり、今後の期待につながる一定の結果が得られたといえる。

予備研究の結果をもとに段階的に実践しまとめた本論文は、看護学研究の発展に寄与する学術的価値を有しており、博士(看護学)論文として価値あるものとして、審査員全員一致で認めるものである。

